

天上人參禾花雀

(空の人參シマアオジ)

高育仁

訳 福井和二

秋風がたつと、一年に一度珠江三角州の農村でシマアオジ猟の季節が訪れる。そんな日の広東省三水市では“シマアオジグルメ祭”が開かれる。毎年10月の初め北国に冷たい風が吹きはじめるとシマアオジが広東省珠江の三角州の田圃に渡ってくる。渡りのピークは、霜の降りる10月8～23日頃である。冷気の南下する時期は一樣ではないので、シマアオジの渡りのピークも年によって多少の変化がある。毎年この季節になると、広東省珠江三角州一帯では渡ってきたシマアオジを迎え、猟で忙しくなる。シマアオジは別名“空の人參”と言われ、この時期になると、その味覚を楽しむために、内外の美食家たちが集まってくる。とりわけ三水市のシマアオジ売りの夜店の繁盛ぶりは並のものではない。

この何年かは、経済発展と庶民生活の向上にしたがって、三水市のシマアオジの名は国の内外に広く知られるところとなり、毎年美食家たちが雲のように集まる。1992年10月5日三水市では第1回禾花雀美食節(シマアオジグルメ祭)を雀友の会によって開催した。これが、経済活動の振興、とりわけ当地の観光業と基礎産業の繁栄、発展を促進した。その後年々盛んとなり、毎年10万人近くの内外賓客が“空の人參”を賞味するため訪れることとなった。

大勢の人が往来することにより、外部の人に三水市を認識させ、経済、産業の情報交換の機会を与え、経済発展の促進に寄与した。

ついでに、三水市の経済発展を進める動力となった、可愛いシマアオジとはどんな鳥なのか？

禾花雀の学名は黄胸鷓(*Emberiza aureola*)で、分類学上はスズメ目アトリ科ホオジロ属*1の小鳥で、大きさはスズメと変わらず、背中が栗褐色、胸腹部は黄色、雄の胸には栗褐色の帯があり、顔が黒い、彼らは渡り鳥の一種で、毎年春と秋の二回、我が国を南北に通り返り、春は南から北の東北地方、内蒙古、ロシア南部、モンゴル、朝鮮、および日本などの繁殖地へ渡り、秋にはまた、南に向かって渡り、我が国の沿海各省および南の多くの地方を経て、海南島、中南半島などで越冬する(秋の渡りルート図参照)。

毎年秋、北方に木枯らしが吹くと、シマアオジは寒さに怯え群れをつくって南に向かい、渡りをはじめ。途中、豊かな秋の実のりを啄びみながら、飛び続けたり、停ったり、したがってそれぞれに肉がつき、肥えふとって、栄養満点、味は最高となる。広東省で“空の人參”と言われるわけはそこにある。珠江三角州は河川が縦横に走り、ヨシ原が続ぎ、広大で豊かな水田など、その環境が空からの来客の理想的な生息場所となっている。彼らは昼のあいだ、水田に分散して餌を啄びみ、夜になるとヨシ原にはいつてねぐらをとる。

千、万というシマアオジが、群れをつくって広東省に飛来し、広東省内の中部地区に大量に集まり生息する。広州市近郊および三水、海南、清遠、四会、広寧、懷集などの地域の農民はシマアオジ猟の豊かな経験をもっている。シマアオジはこの春稲田の間にヨシなどを植えて作られた田圃*2の中でねぐらをとる。ヨシ田は人の少ない、道路から離れたへんぴなところに作られ、小鳥たちには都合の良い隠れ場所になっている。シマアオジが集中して飛来する日になると農民たちの忙しい時が始まる。日の入前に農民たちはヨシ田附近に、長さ5～6mの竹竿を持って、座りながら待ち受け、ヨシ田に飛んでくるシラサギなどを追い払う。サギがいると、シマアオジ

が嫌って寄りつかないからだ。日没頃になるとシマアオジの大群がヨシ田の上空に現れ、夜の宿を探すため、鳴き交わしながら旋回する。一群、また一群、百羽、二百羽とシマアオジがヨシ田の中に集まる。空がまったく暗くなった頃、猟が始まる。まず経験のある農民が泥の塊を軽く投げながら、鳥が集まるようにゆっくりと追う、あるいは録音テープを使って集めることもある。

1組12名、みな一緒に行動し、その中の8名が捕獲網を取り付けた竹竿を立てて網を広げる。網は細いナイロンでつくられ、網の目は、らくに指が通るほどの大きさで、さおに取り付けられた網は蚊帳に似ている。網の長さは20~30m、網の下は地上1mほど、皆でゆっくり移動して猟場に近づく。これらはすべて暗やみの中で静かに行われる。12名の中の2名は追われた鳥が網に入ると紐を引くことを受け持つ、暗やみの中、合図とともに声をあげて追い立てる。シマアオジは驚いて網に向かって逃げる。大群が飛び込んだところで紐を引いて網の口を閉める。

猟が終わるのは夜の9時頃となる。一網かけると千、二千羽と獲れ、1シーズンでは数十万羽も捕獲される。ヨシ田およびその周囲の水溜りが、シマアオジの水飲み場とねぐらを与えることによって、彼らの集中を誘い、これが農民たちの高い捕獲量を提供している。シマアオジは毎年10月に飛来し、三水市が最も多い。これは、イネの穂がでて、開花し、実のりはじめた時期にあたり、シマアオジはもっぱらこうした未成熟のモミを食べる。それ故に禾花雀(禾花とはイネの花の意)といわれる。1羽のシマアオジは毎回30~40粒のモミを食べる。

中国科学院動物研究所の鳥類学者たちの研究した分析では、シマアオジの年間を通しての主要な食べ物は植物食で88%を占め、その内農作物は70%に達する。春は麦穂と蒔いたばかりのイネモミなどが食べられている。毎年18%の雑草の実を食べ、動物性食物の占める割合は11%で大部分は昆虫食、それもほとんどは繁殖期の育雛時に限られる。シマアオジは渡りの季節に大量のモミを食べるばかりでなく、越冬地の海南島では二、三千羽の大群をなし、日中は小群に分散して、水田に被害を与える。活動範囲は半径10kmにおよぶ。彼らは夜間大群で林にねぐらをとる。鳥類学者たちの春の北方での調査によると麦の穂での被害状況は、500株のサンプル中1~37粒、毎穂平均13.9粒で、無被害の場合の500株の麦は10982粒で、被害畑では6752粒、被害率平均59.5%、生産量200kg/a、シマアオジの食害による減産11.64kg、被害率5.82%であった。これらの地方では人を使って追い出しをする。その費用は人を使えば使うほど支出が多くなる。というわけでシマアオジは、農業にとって有害な鳥類である。

珠江三角州の農民は毎年秋に大量のシマアオジを捕獲し、副業の収入を増加させ、翌年のシマアオジの被害を軽減させ、シマアオジグルメ祭を催すことにより地域経済を活性化させる。これは鳥の食害を防除することによって害を益に転換するきわめてよい方法である。当然、網を逃れた鳥も少なくはない。彼らは翌春北国で再び繁殖し、新しい世代が誕生する。シマアオジに絶滅の危険があると心配する必要はない³。

1983年秋、広州市の北で、西漢初年代の大型陵墓が発見された。これは南越国第二代王越味のものだと確認された。その数多い副葬品のなかに意外にもシマアオジの骨があった。この発見は2100年以上も前から広州地方でシマアオジを食べる習慣があり、しかも比較的重要な食品であったことを実証している。

訳注

¹ 中国の分類による。

² シマアオジ猟をするために作られたヨシ田で、網を張り、人が作業、移動出来るように通路が作られ、常に整備されている。

³ シマアオジ猟は現在では禁止されている。